



高知県土佐市  
信清 光宏さん

【プロフィール】

しょうが、土佐文旦を栽培する農家の4代目。1985年に就農。10年ほど前からしょうがの栽培面積を拡大し、現在露地しょうが(土佐一)2.5haを作付。

他剤と系統の異なる  
アフェットは  
ローテーション防除の  
助けになっています。



株元に敷き詰められた薬。土壌の乾燥を防ぐ他、塊茎の肥大を促す効果がある。



山間に広がる信清さんのしょうが畑。獣害対策のため、周りを鉄筋メッシュと防風ネットで囲っている。

### 栽培のポイントは細やかな水管理

古くから生薬として利用され、薬味としてはもちろん、近年では寒い体を温める効能が注目されているしょうが。比較的温暖な地域で栽培されている作物ですが、高知県は国内生産量の約4割を占める、しょうがの一大産地です。

取材で訪れたのは土佐市。温暖で湿潤な気候を活かし、昔からしょうが作りの盛んな土地です。この地で35年以上にわたりしょうが作りに携わる信清さんは、栽培のキーポイントに水管理を挙げます。

「しょうがはとても水を好む作物です。水不足だと生長が停滞してしまいます。しかし、水が溜まるのは嫌うという、とても繊細な面もあります。土の乾燥を防ぐため6月上中旬頃に株元に薬を敷き、同時期から地下水を使って灌水を始めますが、喉を潤してあげるように行い、すぐに水を切るという管理を心がけています。また、排水対策にも気を使いますね」。

作物作りに必要なことは、「シンプルに基本を守り、的確な時期に手を抜かずに行う」と話す信清さん。病害防除に関しても「予防を徹底するという基本を守る」と続けます。「病気を出さないように、圃場に入るときは靴、手袋は新しいもの使い、作業後の道具は毎回洗浄しています。また、犬や猫などの動物が畑に入らないように、ほとんどの圃場に鉄筋メッシュと防風ネットを張っています」。作業するときには毎回外すのが大変です、と笑いながら、病害防除への意識の高さを見せてくださいました。

### 病害対策は予防を徹底。

#### フロアブル製剤のメリットも実感

しょうがの生育期から発生し、茎葉部を侵す白星病。雨の多い年は特に多発し、しょうが作りではお断りできない病気です。「白星病はとりわけ秋の収穫前に発生してしまうのが怖い」と話す信清さんに、病害管理について伺いました。

「白星病は発生してからでは抑えるのが難しい病気なので、防除は予防が基本です。私の場合は白星病を抑えるために一作で15回程度、5月の中旬頃から約10日間隔で薬剤を散布しています」。予防防除を徹底する信清さんは、白星病防除にとって特に重要な7月以降の散布薬剤にアフェットフロアブルを使用されているそうです。「アフェットは7月から9月までの薬剤ローテーションに、計3回使用しています。しょうがに登録がある薬剤自体が少ないので、アフェットが発売されて本当に助かりました。それに、他の殺菌剤とは系統が異なるので、ローテーションも組みやすいですね」。効果の他にも、「フロアブルという製剤も計量しやすいし、攪拌時も溶けやすくて使い勝手がいいですね」と、メリットを感じている様子です。

また、薬剤の散布方法についても、こだわりを教えてくださいました。「しょうがの背丈が低い時は、散布液量も反当り150ℓほどですが、生長に合わせて200ℓ、300ℓと増やしています。かけ漏れのないように撒くのが、基本に忠実な方法だと思いますね。撒いたのに効かなくなったということが、一番高つくきますから」。

### しょうが作りへの飽くなき探求心

知見を広げるため、海外視察も行う信清さん。「昨年、今年はコロナ禍で行けませんでした。例年中国や東南アジアなど、しょうが作りが盛んな国に研修を兼ねて行っています。土地柄もあると思いますが、海外は栽培を楽しんでいる雰囲気があっというまです。一度は海外でのしょうが作りも考えたという信清さん。栽培への探求心は、これからも尽きることがありません。



収穫したしょうがを保管する予冷库。信清さんは2棟の予冷库を所有。

### 信清さんのアフェット®フロアブルの使い方

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
栽培ステージ				植え付け		土寄せ・敷きわら						収穫
病害発生時期							白星病					

アフェット®フロアブル散布時期

白星病の重要防除時期の7~9月の間にローテーションの中で3回散布

#### 〔産地情報〕

高知県のほぼ中央部に位置する土佐市。温暖な気候に恵まれ、しょうがの他きゅうりやネギなどの野菜類、土佐文旦や小夏などの柑橘類など、様々な作物が栽培されています。